

木漏れ陽

12月

令和元年12月2日第58号
発行佐賀市教育研究所
発行責任者 所長 松島正和

あさやけの中で

先日、佐賀大学の教育実習の事後指導で、4年生約180人に話をする機会がありました。皆、きちんとした服装で、とても意欲的に参加している姿が印象的でした。基本的に教職を目指す学生が多く、なによりもその「希望」のオーラが、大講義室いっぱいに漂っていました。我々の頃には卒業してすぐに採用というのは珍しく、かなりの人が常勤・非常勤講師等をしながら、長い年月をかけて正式採用を目指していたように思います。ここ数年の教員採用試験倍率の低下により、聞くところによると、この中の3割程度の学生が、4月より正式に採用され、教壇に立つとのことでした。

学校を取り巻く環境の変化の中、日本の教師の残業時間は、世界でもトップクラスといわれています。学校が抱えている課題の多さや、教師の業務の増加・多様化等からブラック企業と呼ばれて久しいですが、このように、教師を目指す若者を見ると心から頑張してほしいと思うと同時に、若手教師の育成の重要性を感じました。現場に立ったときに「希望」を失わずにいてほしいものです。

私の市教委での業務の一つに不登校対策があります。佐賀市の現状としては、平成30年度において、小学校79名(0.63%)、中学校239名(4.41%)で、やや増加傾向にあります。また、全国(小学校0.7%、中学校3.65%)、佐賀県(小学校0.59%、中学校3.54%)においても同じような傾向が見られます。学校現場においては、各学校において、各先生方が校内はもちろん、外部の専門家の方々等との連携を図りながら、組織的かつ献身的に児童生徒の支援に力を注いでいただいています。市教委といたしましても、現場の先生方と情報共有、共通理解をしながら、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、サポート相談員、学習支援員、適応指導教室「くすの実」、また様々な専門家や専門機関の方と連携をとり、毎月の不登校対策会議や、7時の集いの開催等、組織的に不登校対策を進めているところです。

不登校対策業務の中で、多くの専門家の方と関わらせていただいておりますが、みなさんに共通していえることが、相手に「希望」を与える、人としての温かさや優しさを感じます。どの児童生徒、保護者もそうですが、特に困り感がある児童生徒、保護者にとっては、この「希望」が大切であるように感じます。児童生徒の特性や実態に合わせ、寄り添いながら、いかに「希望」を与え続けていけるか、粘り強く取り組んでいきたいものです。

私は、朝焼けの景色が大好きです。季節によってもその様相は変化しますが、その光景は、「これから始まるんだ」「がんばろう」と意欲を駆り立ててくれます。なぜそう思うのかと聞かれても、そう思うからとしか答えようがありませんが、その景色・空気に、大いなる自然からのメッセージ、「希望」を感じます。希望があれば頑張れるというのは、児童生徒でも大人でも共通していることではないでしょうか。だれもが「希望」をもって生きていける社会の実現に向けて、児童生徒に関わる者として何ができるのか、これからも考え続け、実践していきたいものです。



(学校教育課 指導主事 河野貴徳)

平成31年度個人研究 5名の先生に委嘱

今年度は、5名の先生に個人研究を委嘱しました。自分の研究主題に基づいて1年間研究を積み重ねた成果は、令和2年3月の佐賀市教育研究紀要に掲載予定です。佐賀市の先生方の教師力向上に資す内容で、参考になる取り組みがたくさんあると思いますのでぜひ楽しみにお待ちいただき、お読みください。(権藤順子)

学校名	氏名	分野	研究の概要(主題文より一部抜粋しています)
赤松小	斉藤大貴	特別活動	学級・学校生活に楽しみを見出し、高め合う子供の育成
高木瀬小	鶴田祐樹	特別活動	学級に不適應感を持つ児童の自己有用を高め、意欲的に学校生活を送ることができる支援の在り方を探る。
高木瀬小	内田愛友子	特別活動	自主的・主体的な態度を育てる係活動を活発にするために
思斉小	松尾紘希	算数	プログラミングのよさを生かす算数科学習の研究
思斉小	江口理子	国語	指導と評価が一体となる単元構成の工夫～国語科「読むこと」の指導を通して～

学校全体の特別支援教育力向上に向け、授業スタイルの工夫・改善を

文部科学省は、特別支援教育について次のように位置づけています。

障害のある子どもたちが自立し、社会参加するために必要な力を培うため、子ども一人一人の教育的ニーズを把握し、その可能性を最大限に伸ばし、生活や学習上の困難を改善または克服するため、適切な指導および必要な支援を行うものです。

特別支援学校のみならず、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、中等教育学校の通常学級に在籍する発達障害のある子どもを含めて、障害により特別な支援を必要とする子どもたちが在籍する全ての学校において実施されるものです。

私は、特別支援教育は「学習環境や授業づくりの手だてを工夫することで子どもの困り感を軽減し、子ども一人一人の状況に応じた指導内容や指導方法を工夫し、自立に向けた学びを積み上げる教育」ととらえています。

佐賀市の各小中学校では、学校全体として特別支援教育に取り組んでいただいていることと思います。そして言うまでもなく、特別支援教育は特別支援学級に在籍する子どもだけが対象ではないですね。

現在、通常学級および特別支援学級には、知的な発達の遅れをもつ子、発達障害の診断をもつ子、発達障害傾向の子、児童虐待や保護者の不適切な関わりにより発達障害的な行動が見られる子等、支援が必要な子どもが多くなり、先生方は多様な支援を求められ、先生方の困り感も大きくなっている現状があると思います。

「困り感が大きい子は個別の支援が必要な子」と見ることは大切ですが、先生方が自分の授業スタイルを振り返り、授業スタイルを工夫・改善することが、子どもたちの困り感の軽減につながることもあると思います。たとえば

- ・子どもが発表する際の「ハイ、ハイ、ハイ」の連呼や「皆さんどうですか？いいで一す」というやりとりの授業スタイルで、困り感を感じている子はいないでしょうか？
- ・授業時間の半分以上、先生の長い説明を聞いているだけの時間を過ごす授業スタイルで、困り感を感じている子はいないでしょうか？
- ・先生の発問に対し、手を挙げる数人の子もたちとのやりとりで授業が進んでいく授業スタイルで、困り感を感じている子はいないでしょうか？ 等

このような視点で授業スタイルを工夫・改善することが、子どもの困り感の軽減につながり、さらには先生方の困り感の軽減にもつながると思います。

それぞれの学校では、確かな学びの定着・向上に向け校内研究に取り組まれていると思います。校内研究による授業づくりを核として、学校全体で日常の授業スタイルにも目を向け、先生方が自分の授業スタイルを振り返り、授業スタイルを工夫・改善することが、子どもの困り感を軽減することにつながると考えます。そして、この取り組みは学校全体の特別支援教育力向上に向けた有効な取り組みの一つになると考えます。

※「困り感」は、学研の登録商標です。

(特別支援教育係就学指導員 船津 智)